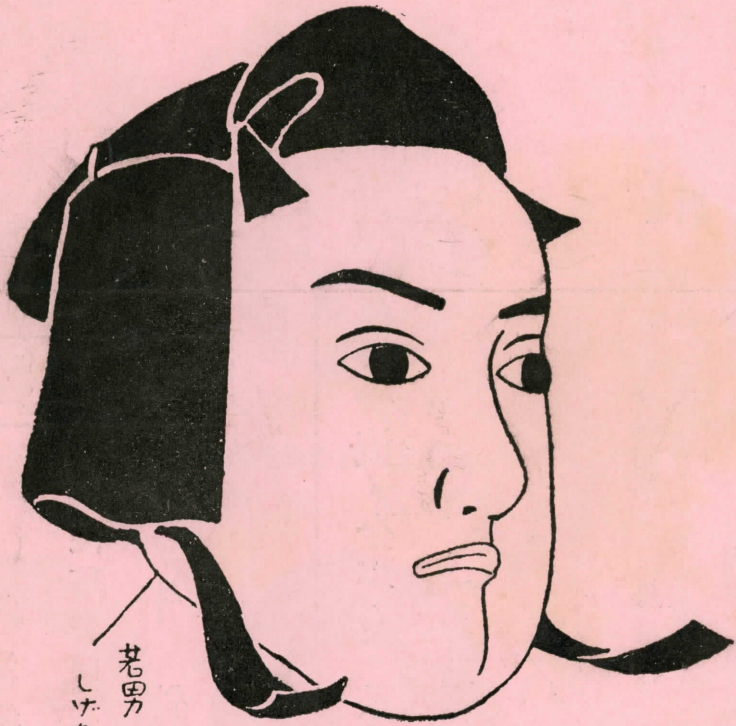


棹

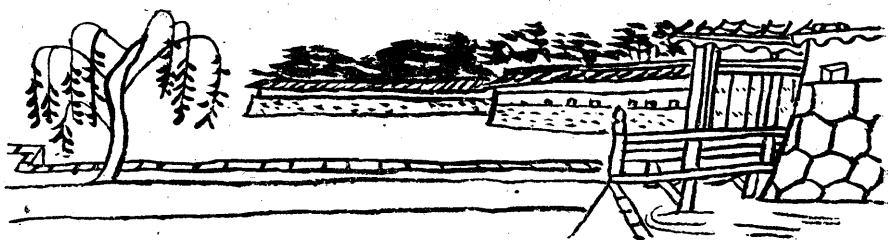
太



老男
しげを画

第
百
三
號

行發社棹太京東



太
棹
第三百二號目次

義太夫節の今昔……………是澤悟園…(二)
 三月下旬の文樂……………齋藤拳三…(八)
 實事……………中野三允…(二二)
 『壺坂』の初演年代に就て……………三五郎…(二六)
 名人豊澤松太郎師を偲ぶ(三)……………川端柳蛙…(二八)

新作淨瑠璃

眞木薰皇國礎……………草庵忍人作…(三)
 ……………野澤勝平曲…(三)

對話……………新川二八朗…(二七)

大日本素義淨曲競演會成績……………(二八)

太棹社彙報……………(二九)

太棹俳壇……………芳河士選…(三六)

當座帳……………芳河士記…
 編輯後記……………

表紙・カット……………宮尾しげを…



新作淨瑠璃

新義座上演

眞木 薫 皇國の礎

草庵 忍人 作
野澤 勝平 曲

この新作淨瑠璃は皆様も御承知の通り、大楠公崇拜者として大楠公以来の勤王家と言はれた眞木和泉守を主役として、維新の深刻な場面の一端を、忍人先生に書き下して戴き、未熟乍ら一座が去る二月十八、十九兩日神港有志の絶大なる御後援の下に神戸花隈町神港俱樂部で初演をさせて戴いたものであります。國を擧げての非常時、出征第一線の方々も銃後の國民も各その立場より御奉公に徹し居られる時、私等も、やれてもやれなくともやらねばならぬ覺悟を決して出演致しました次第で、來る五月上京の際には是非上演させて戴き皆様の御批判を仰ぎ度く存じます。

國家的偉大なる人物の活躍を、私等の藝で、どこまで表現致し得るかと考えます時、たゞ責任の重い心のみこみあげて参ります。何卒私共懸命の微意を御くみとり下さいまして、此上共御鞭撻の程偏に御願ひ申上ます。

大阪文樂 新 義 座

水田寓居の段

すめる世も濁れる世にも湊川絶えぬ流れの水や汲まゝし、

さるほどに眞木和泉守平保臣、心は遙か九重の、雲井の空に走れども、身に降りかゝる濡衣を晴らすよすがもなかく、水田の渡り十餘年、忍び慎みかこちける、今日しも五月二十五日、大楠公の命日に、志ばかりの手むけごと、銘千年と名づけたる、秘藏の四絃とりあげて、さはさりの曲奏しける。折しも表に卑しからざる一人の武士「頼もう」と訪えば奥よりやさしき女の聲「どうれー」と立ち出で、私ことは當家大鳥居敬太の妻琴路に御ざりますと、淑やかに迎ふれば、武士は慇懃に一禮なし、國某は筑前の處士、平野次郎國臣と申す者、眞木先生の警咳に接したく、罷り出で、ごさる、何卒お取次下され。と禮儀正しく來意を告ぐれば、琴路は聽いて氣の毒顔。琴義兄和泉守は、此程より、謹慎中に御ざりますれば、何方様にも御面會を避けて居ります、折角の御入來なれど悪からず御承引下さりませ。國それは是非なきこと、されどまことに心残り、矢立とり出しさら〜と一首を認め、國御内儀まことに恐れ入るが卒爾ながらこれ

を先生におとりつぎ下さるまいか、**琴** かしこまりました暫くお待ち下さりませ、と琴路は立つて離れに入り、和泉守に手をつかえ、**琴** 只今筑前の處士、平野次郎様と申される方義兄上に御意得たいとお越しなされましたれど、かねての御申附けにより、御断り申上げましたところ、これをとりつぎくれよとのことに御ざります、とさし出だせば、和泉守はうちながめ、**和** 何、四つの緒の琴のしらべのねにめでいきこえまほしくかねてしのびつ、和泉守は心にうなづき、**和** 平野氏がかねてより聞及ぶ勤王の志士、粗忽なきようお通し申され、**琴** かしこまりました、と琴路は表へ引返し、**琴** 何卒お通り下されませ。**國** そりや先生にはお會ひ下されまするか辱ない、然らば御免。とうち連れて小庭づたいに山柁の香り床しく清楚なる和泉の居室に通りける。國臣は威儀を正し、**國** 豫て先生の御高名を拜聞致し、御高説を承りたく突然罷り出でしところ、早速の御引見辱のふ存じ申す。和泉守も禮を厚ふし、**和** 御詞にて痛み入る、何分幽囚の身にて何事も心に任せず、只管謹慎罷在る、さて今日は大楠公の御命日なれば、心ばかりの祭事を營み居りしに、貴殿の如き勤王の士を御迎え申すは、これも偏に楠公の御引合せかと、保臣恐悦に存じ申すと言葉に禮をつくせども、平野の眞意如何ぞと、眼を据えて觀つむれば、國臣もジツト凝視し、こは聞きしに勝る大丈夫、共に國事に殉するは、かゝる偉傑ぞ頼母しき、如何にもして起たせんと、死を決て詰め寄れば、和泉守

はそれと察し、息を凝しておしかへず、龍虎相打つ氣魄の闘ひ、互の意氣や通じけん燃る瞳は次第に潤るみ、何時か接する膝と膝、互に手と手を握しめ、**國** 和泉守殿。**和** 平野氏互に心うち溶けて照す至誠ぞ薫りける。**和** 平野氏御來意は推察致した、拙者元より天朝に捧げし命、粉骨碎身以て國難に殉するは覺悟の上なれど、要は其方法で御さる、御名案あられるか。と言はれて國臣聲をひそめ、**國** 某はこれより薩摩に參り、藩主を説いて奮起致させたく存じ申すが、この儀如何で御ざりましような。と謀れば、**和** 薩摩は近頃外藩の武士の入國を厳しく禁じ居ると承るが何か好き手段にても御さるか。**國** されば薩藩には西郷吉之助始め他に數多知人も御ざれば如何様とも相成ること、存じ申す。和泉守はしばし思案の體なりしが心を決し、**和** 平野氏、拙者もお伴致さう。**國** そりや先生にも御同道下さりますか。**和** されば平野氏拙者身に犯せし罪はなけれど藩命なればもだしがたく、今日迄謹慎罷りありしが、國難は日と共に深く、最早座視するに忍び申さぬ、時機を見て脱藩せんと覺悟致し、先頃愚弟敬太親子に建白書を持たせ、都へ發足致させ申した、幸貴殿の御來駕を機とし、この處を立ち退き申す。**國** 承知する、之より一旦、肥後松村大成の宅へ參り後事は其處にて御相談致さう。**和** 何分よしなに御願ひ申す。と言ひつゝ書狀認めて手を打なれば、嫁の琴路は手をつかえ、**琴** 御用で御ざりますか。**和** フム吾はこれより平野氏と暫く他行致す、こ

れに委細は認めれば、倅菊四郎にこれを渡し、後より參れと傳えてくりやれ。琴 確に御渡し致しまする、それはマア急の御發足、この頃捕吏の者も目をつけて居りますようす、晝日中その御服装では。和 イヤ、夜は却つて面倒服装もこの方が目立たぬ、まさかの時は覺悟がある案じることはない、それより琴路どのあつたことを頼み申すぞ。琴 かしこまりました。和 やがて世の春に匂はん梅の花片山里の重なれども、と口ずさみつゝにつこりと、和 平野氏御待せ申した。國 では御案内仕る。と泰然として表に立ち出で、肥後路をさして急ぎけり。あとに琴路はとりかたづけ、箒持つ手も右左夫を案じ子を思ひ、今又義兄の門出でに首尾や如何と女氣の、降るみ降らずみ梅雨空は、琴 エ、うつとしいことではあるわいな。

長州奥書院の段

天に一日明なれど時に暗雲光をとさず、國家順逆を誤れば政治亂れて威令行はれず、民その向ふところに迷ひ外に他國の輕侮を招く、されば防長二州の城主慶親公前代未聞の國難に、侍臣を遠ざけ、家老宍戸備前とたゞ二人、心を碎くその折から、若侍罷り出で、若 只今真木和泉守殿御召によつて參上次ぎへ控へて居ります。慶 ア、左様か直に之へと申せ。若 かしこまりました、と立て入る。案内に連て和泉守禮儀正しく入來り、下手に座して一禮なし、和 御召により保

臣罷り出まして御ざります。慶 大儀である。ヅ、ト進まれよ。和 ハ、一失禮仕ります。と進み出で、三人鼎の座につけば、慶親公は徐に、慶 和泉守今日其方に登城を求めしは余の儀ではない、此度の國難に對し其方の所存が聽きたいのぢや、尤も大略は書面にて察し居るが、今日は餘人も遠ざけあれば、隔意なく意見を述べてくれい。慶 コリヤ備前、先づ其方の考を述べて見よ。備 さればに御ざります、我が日の本は神武以來嘗て外夷に犯されしことなき國柄なるに、幕府は綸旨を待たづして外國と開港條約をなし、朝廷より譴責あるも言を左右にして攘夷の實を致さず、此まゝに打過ぎなば國家の前途寒心に耐えませぬ、さりとて幕府は最早頼みになり申さねば、此上は勤王の士を奮起せしめ、直接攘夷の實を擧げるの一途あるのみかと愚察仕ります。と決意を示せば、慶 フムして和泉守其方の所存は如何じや。和 ハア、憚りながら備前殿の御説一應御尤の様に御ごりますれど、攘夷は外にあらすして國內にあるかと存じます。と言へば備前は意外の面持ち、備 何と仰せらるゝ。和 されば備前殿抑我が御國體は、一系一心、即ち一君萬民、君民一體にして之の法則で御さる、外に輕侮を招くは、内亂れたるに因る保臣つらゝ、按ずるに、今日の國難は、其因遠く、七百年の昔に發す、畏くも我が國の政治は上御一人の嚮せ給ふ物にして、宰相、諸卿、侯伯は、補弼の任に過ぎ申さぬ、然るに中古臣家の權力争鬭に、武力を以ひしたため、武家は思ひ上つて

政治をも私致し遂に皇道を覆ひ、霸道を辿ること久しく、その間楠公の如き勤王の士出でまして、その然ざることを示されしも、時機到らずして止み、暗雲また天を扉す、これ天理に背く道理、如何でか天責なからんや、されば、我等は天に代つて、先づ討幕の實をあげ、兵馬の大權を天皇に奉歸せしめ、政を古に復歸致させねばなり申さぬ、これぞ我が國本來の面目、よつて攘夷は外にあらずして、内にありと申せし所以で御ざる。と朗々と説き來れば、備前尙も言葉を進め、

御高説一々感銘仕る、然るに討幕は言ふべくして中々容易のことに御ざらぬ、幕府漸く衰えたりといへども、水戸家は別として紀州、尾州侯を始め、普代の諸藩も數多あれば武力を以つて對するには、勢ひ薩長土の如き優藩を起しめねばならぬかと存する、其これに依つて事成就せし曉、第二の幕府出現致さざるや、此儀聊か懸念に存する。と詰れば、和程殿上人は官位高くして力之に及ばず、また勤王の士は諸國に奮起致すと雖も、多は悲憤慷慨のみあつて智略乏しく、且つ兵站の資件はず、御説の通り優藩の力に依る可も、我等は天意を體しての蹶起なれば、現在の幕府とは其動機に於て天地の相違、決して御懸念無用に存する。備 然らば目的達成の時、彼等も等しく天子の赤子、將軍以下諸侯幕吏は、如何處置なされる御所存なるや。和 されば、彼等歸順の實を示さば、その罪を惡んでその人を惡まず、國民本来の姿に立ち歸らしめ、將軍以下能あるものは、それ相應に重用致して何

の憚るところ御ざらふや。備 成程國內はそれにて條理相立ち申さんが、今ふりかゝる外難は如何打開なされる御所存か

和 これは末の問題なれど、序なれば申あげん、内に一系一心を確立し、護るに國力の充實こそ必要で御ざる、承るところによれば、外夷は兵は訓練に於て、また武器機械等ははるかに、彼、我に勝ると聞く、されば勉めて彼に接近し、その長を採り短を補ひ、進んで交易を開き、徳を樹て、以つて彼等を依らしめねばなり申さぬ、無意味の鎖國は國威を宣揚する所以で御ざらぬ。備 然らば幕府の採りし開國手段を責めるは如何なる理由に因られるか。和 第一は違勅の罪、第二に外夷を恐れ、その要求に應ぜしは耐えがたき國辱で御ざる國事の一切を至上に奉り、君民一體となり、而て後、我進んで彼を迎ふれば、決して外に輕侮を招くことなく、また恥辱にはなり申さぬ。備 御説の通り開國致さば、數多の外人入り込み我國の美風を汚さんも計りがたく、この儀何となされるや。和 それは心すべきことなれど、世に比類なき、萬世一系を奉き、億兆心を一つにして、これを護れば、古佛教の到來によつて世の無常を知り、刹伐の氣分を鎮め、また儒教の入り來れば忠孝の道理を究め武士道を確立し、その他藝術建築、器具、調理等、有ゆる文化を消化し盡し、これを國家の血となし肉とこそなせ、之によつて我が御國體の心髓は微動だも致さざるは、歴史の上に明かなれば、何とて恐れることとの御ざらふや、進んでこれを取り入れ、以つて國威を宣揚

し、世界萬民をして、皇化に浴せしめること、これ畏くも太祖このかた、一貫せる大御心と拜察奉る、これぞ大和民族の使命で御ざる、また人生の快事では御ざらぬか。と全身燃て和泉守、一言一句火を吐くばかり、宍戸備前は両手をつき、

實にもつて恐れ入つたる御見識、備前慚愧に耐え申さぬと禮を盡せば、和泉守も嬉し氣に、和 御挨拶に痛み入る、先づ御手をあげさせられ、御納得あつて御同慶に存じ申す。

とへりくだる、慶親公は始終の様子見てありしが、慶 アイヤ和泉守其方先頃南へ行きしと承つたが、薩摩の真相は如何であつたの。和 ハ、薩藩は公武合體論と見受けましたれば、私の考へとは、根本に於て相違致しまする、たゞ西郷吉之助に面談致すことの出来ざりしは、今以て残念に存じ居りまする、また土州は未だ藩論纏り居らざるやに聞き及び居りまする。慶 フームシテ其方以後の方法は如何致す所存じや。と問はれてハツト和泉守、こゝぞ成否の分れるところ心を鎮め威儀を改め、和 この國難を双肩に負ひ、皇國のために起たれるは御當藩を置いて他に御ざりませぬと存じまする、天地神明も御照覽あれ、保臣身命を捧げ、此儀御願申上げ奉る、と聲涙共に降る悲壯の直言、返答如何にと凝視る眼光親み易く浸し難く心から對人^{あひて}を畏服せしめる稀代の偉傑、慶親公も眼を潤ませ、慶 和泉守理解つた、防長二州は皇國の捨石じや、是より直に義軍を都へ上す、總監は和泉守國家のため其方の命は貰つたぞ。和 ハ、保臣が身の面目、有難く

御請け仕りまする。慶 ヲ、過分じや、コリヤ備前兵站の資、其他手落なきよう取り計らえ。備 ハ、一。三人は胸の雲晴れて交す心ぞ嬉しけれ。

天王山の段

こゝに眞木和泉守保臣は、義軍を率い都へ上り、君側の奸を除かんと禁門へさしかゝる、時戦利あらずして、天王山の陣營に退き返す。向ふを見れば淀八幡麓は山崎高槻まで、數萬の軍勢取り圍む、今を最後と和泉守、後につゞいて松山深藏其他決死の十六勇士、和泉守は徐ろに、和 義軍は遂に敗れ三將は己に此地を通る、今僅少の殘兵を以て徒らに要害を憑むも、これ石を抱いて淵に臨むの愚でござる、拙者は此度の巨魁として防長二州の藩士をはじめ諸國の志士を率ゐ、血を以つて禁門を濫せしのみならず、五卿及び長門宰相御父子には、更に罪を累ねし道理、その責は吾一ツ身にあり、故に此地を最後とし九泉の下より謝罪致す諸士は飽まで、尊王攘夷を貫徹し、一ツ敗以つて屯挫してはならぬ、彌々發奮精進して皇國のために盡して貰ひたい、躊躇するところでない、速かに此處をお引き揚げ下されい。と懇々と訓せば、松山深藏進み出で、松 總監の御教訓は御尤もなれど、吾等は他藩の者なれば、今總監を亡ひて長門へ下るも詮なきこと、この場を最後に御供致す。と動く氣色も見えざれば、和泉守も詮

方なく、然らば最後を共にせん、と盃交すその折から、麓の方
方に武者一騎、母の遺品と紅の小袖は萌ゆる緋縮緬花も恥
ろふ艶姿、此方をさして登り来る。菊 お父上、くヲ、父上
これにおはせしか。和 ヲ、菊四郎存命なりしか、近ふく
菊 ハ、ア。和 今汝に申附ける一大事あり、汝は是より長
門へ下り諸卿を始め、慶親公へ此場の様子詳さに言上致し、
また傳手を得て、薩州西郷吉之助殿に面會致し、薩長二州は
従來のゆきが、りを捨て協力一致以つて國難に處せられる
よう御盡力御願申せ、これ父が最後の詞なり、委細はこの書
面に認め置いた、この大役は汝の身にとりこの上もなき光榮
なるぞ、必ず成就致さねばならぬ。菊 ハ、父上の御言葉に
御ごりませすれど、この大役は餘人をお選び下されませ、私は
父上と最後を共に致しとう存じます。和 コレ死ぬばかり
が忠義ではない、あれを見よ常々父が申聞かせし、楠公御父
子訣別の場所は直この下の櫻井の宿じや、吾等は大楠公に比
すべくもないが、七生報國は貫かねばならぬ、偲べば大楠公
は偉大であつた、汝の會得致さねばならぬのは此一事であ
る、されば汝は直に長門に下り父の志を繼いで、同志と共に
再舉を謀れ、之ぞ子として汝のとるべき唯一の道じや、理解
つたか、サア速くたて、と言はれて菊四郎、父の教訓は道理
なれど流石親子の哀別に心を残し立ちあがれば、和 コリヤ
その姿にては人目にたつ、衣服を更め間道より氣どられぬよ
う氣をつけて參れ。父の言葉に菊四郎、あとふりかへりく

木蔭に忍び落にけり。折しも寄せ手はざはめきたち三方より
攻め登る、和泉守は莞爾として、和 イデ方々川意よくば最
後の一戦。と下知すれば勇士は各々部處につき、地物を楯に
身をかくし、矢頃はよしと撃ち出せば不意を喰つて寄せ手は
驚ろき、列を亂して逃げまどひ、麓の方へ退きけり。和 アナ
心地よき今の一戦、これにて思ひ置くことなし、方々最後の
座に着かん、と靜かに矢立とり出し、大山の峰の岩間に埋め
けり、わが年月の大和魂」と辭世を記して小枝につるし、髪
とりあげ一同は容姿改め東に向ひ、和 眞木和泉守平保臣、
つゞいて同志十六名只今自決仕る。と都の方を伏し拜み豫て
用意の枯枝に一同座して火を放ち、腹一文字に割き切れば、
火は焰々と燃えあがる、凄慘極まる烈士の最後、相は灰と消
えぬれど忠魂世々に留りて叡慮を安じ奉る礎とこそ、知られ
ける。

胃腸にミラカチ